

## 続・〈人類〉について雑談してみる

哲学とアートのための12の対話2024「土曜の放課後」⑦（話す会③）

FRAME in BOX / 2024年9月28日（土）

前回の対話では芸術認知科学者の齋藤亜矢さんから、現存する霊長類で私たちホモ・サピエンスに一番近いとされるチンパンジーの描画を通して、人間と何が違うのか、他の動物と人間の「知能」とはどこが違うのか、といったことを通して、そもそも〈人類〉とはどういう存在なのかということを考えてみました。さて今回の「話す会」では、〈人類〉について考えるためのさらなる雑談の材料を探してみたいのですが、ピッタリというような文章は見つからない。それで、まず最近『モンキー』という雑誌にサルについて書いた短いエッセー「ましらのごとく」と、だいぶ前に書いて『ミニマ・エステティカ』①にも収録した「セレンディピティの彼方へ」という文章を資料にしました。

「ましらのごとく」は野生動物としてのサルについてというよりも、日本文化の中で人はサルをどのように見てきたか、言葉や想像力の中にどんな形で入り込んでいるか、ということについての考察です。

ちなみに「モンキー」というのは厳密に言うとニホンザルを含むオナガザル科（旧世界猿）とオマキザルなどの広鼻猿（新世界猿）の総称らしいです。それに対して現代の分類では「ヒト科」に属するチンパンジーやゴリラなど、大型で尻尾がない（あるいは短い）霊長類は「エイプ（ape）」と呼ばれますが、日本語には相当する言葉がありません。仕方がないのでこれらも「サル」と呼びます（映画『猿の惑星』は原題は *Planet of the Apes*）。西洋近代文化においてはサルは人間社会を批評する存在としてキャラクター化されたり（『猿の惑星』はその現代版）、単なる悪者だったり（ポー「モルグ街の殺人」、キングコング）、19世紀にはダーウィン進化論への反応として「人類の先祖はサル」という誤った観念が生まれたりしました（現在もまだ残っている？）。

「セレンディピティの彼方へ」は、2006年に当時勤務していたIAMAS（情報科学芸術大学院大学）で「岐阜おおがきビエンナーレ」というメディアアートの展覧会を企画し、その「じゃんけん——運の力」というテーマについて書いたエッセイです。これは、人間特有の知能・知性というものがよく脳の大きさ、とりわけ大脳、前頭前野の発達にのみ関係付けられることが多いが、知性とは本当にシンボルの処理や計算の能力だけなのだろうか？という疑問から書きました。

### セレンディピティの彼方へ——知性とは何か？

人類を他の生き物たちから区別するのは、それが高度な文明に到達したという点にある。それでは文明の発達がなぜ可能になったのかといえば、それは人類が他の動物よりも大きな脳を持ち、その分だけ「頭がいい」からだという答えが返ってくるかもしれない。人間が多くの動物よりも大きな脳を持っていることは事実だけれど、大きな脳を持つがゆえに賢いという前提は——「万物の霊長」としての人間という古い単純な自尊心をいまだに満足させるかもしれないけれども——完全に間違っている。脳の大きさは、頭のよさとは直接関係がないのである。

そもそも「頭がいい」とはどういうことだろうか？ たとえばそれが「個体の生存や種の繁栄」という生物としての基本目標を、できるだけ確実に低コストで実現する能力」といったことを意味するのであれば、人間よりもずっと小さな脳をもつ魚や昆虫の方がよほどすぐれているように思える。いやそれどころか、細

菌やウィルスのように、そもそも脳なんていう厄介なものは持たないという選択をした生き物のほうが、よほど「頭がいい」とすら言えるのである。

いや、そこまで話を広げなくても、人間どうしを比較してみただけでも明らかだ。大人は子供より、男は女より大きな脳を持っている。けれども大人の男が仕切ってきたこの世界が、戦争や社会的不平等や環境破壊にこれほどまで苦しんでいるありさまをみれば、彼らが女子供より脳が大きい分だけ頭がいいなどは、とても思えない。人種間の比較ではどうか。体重に対する脳重量の平均的な比率は、白人や黒人に比べてモンゴロイドがわずかに高いそうだ。けれどもこの事実も、幼稚な人種主義的優越感を刺激するだけであり、脳の大きさの違いが知能や文明度に何の関係もないことは明らかである。

最近日本では、身体を鍛えるように脳をトレーニングするという奇習が横行している。記憶力や計算能力のように、比較的数値化しやすい能力をめやすにして、それをゲーム機やドリルを使って訓練するというのである。こうして脳のパワーを高めたり、加齢による自然な変化に逆らって、それを維持する必要があるというのだ。現代社会では歳をとることは、肉体の外観や身体能力においてばかりではなく、知的能力においても、これほどまでに忌み嫌われているのである。「ボケる自由」すら許されない社会が到来した、とも言える。

生きた身体や知能をいつまでも「性能の高い状態」に保っておくのは望ましいかもしれないけれど、そのことにこだわりすぎるのは、生の本質的問題からの逃避でしかない。いくら能力が高くてでも対処できない問題が存在するからである。その一つが老い、つまり能力それ自体の減衰であり、病気や事故、天災や人災といったアクシデントであり、その根底には、自分がたまたまこの場所に、このような人間に生まれてしまったという「運」がある。それらはまったく制御のきかない偶発事というわけでもないが、かといって能力や努力によって克服できるものでもない。生は運に浸透されており、人類はそのことについて何千年もの間、様々な形の思考を積み重ねてきた。単純な問題解決のプログラムに従うのではなく、いかにして世界を受け入れ、偶然性に脅かされている自分の生を納得するかについて考えてきたのである。このことは人類文明のもうひとつの重要な側面であり、人間的な知性のあり方を示すものである。

だが今の時代は全体として、そうした意味での知恵を軽視する傾向にある。それは科学技術の普及にともなって、テクノロジー的な思考形式、つまりあらゆる事柄を「問題解決」という枠組みでとらえるような考え方が普及したからである。たしかに、人間が長い間なすすべもなく受け入れるしかなかった病気や自然の脅威を、技術の力で避けうるようになったり、またそれまで神の領域とされてきた生殖や老いや死までもを、ある程度人為的にコントロールできるようになった。そしてそうした技術が現代では、最大の価値を付与されている。そうした環境の中に生きてみると、人々はあらゆる問題が、努力や工夫、技術的進歩によって解決できるかのような幻想をいただくようになるのである。

情報技術は、そうしたテクノロジー的な思考形式がとりわけはっきりと現れる領域である。先述した人間の「頭のよさ」を脳の機能と同一視する考え方も、コンピュータというモデルが今や誰にとっても身近に存在するような社会だからこそ、可能なわけである。そういうモデルに従って、人々は国家や社会や人生を「プログラム」しようとし、何かうまくいかないことがあると「バグ」を見つけ出そうとする。たとえば会社であれ学校であれ、システムがうまく機能しないのはその内部の特定の人間のせいだとか、規則の一部の不具合のせいだとか、チェック機能が不備であるからだとか考える。そして、そうした「パーツ」を入れ替えれば、あるいは監視を強化すれば解決する、というふうに結論づけるのである。

こうした考え方が間違っているというのではもちろんない。システムの・テクノロジー的な思考形式は人類が洗練させてきた知性の重要な一側面である。ただ、現代という時代はあまりにもそれだけに頼りすぎており、バランスが悪い。別な言い方をすれば、テクノロジー的思考によっては原理的に対処できない世界の側面に対して、現代の私たちはあまりに鈍感になってしまったのである。

....この問題を考えるために、「セレンディピティ(Serendipity)」という言葉について考えてみたい。これは、英語としては比較的知られている概念ではあるのだが、注意深く考えてみると、それが何を意味しているのかは、必ずしも明確ではない。この言葉はそもそも、18世紀イギリスの作家ホレス・ウォルポールが、自分が子供の頃読んだ『セレンディップの三人の王子』というおとぎ話から造った造語である。「セレンディップ」というのは現在のスリランカの名であり、この物語は、知性と勇気と芸術的センスを備えた三人の王子が、やがて王位を継ぐために修行と遍歴の旅に出る、というところから始まる。旅のそもそもの目的は、王国の海路を脅かしていたドラゴンたちを退治する秘法が書かれた巻物を見つけ出すことである。ところが探しているものはなかなか手に入らず、そのかわり旅の途上で様々な困難に遭遇して、それを持ち前の洞察力と機知によって、思いがけないやり方で解決してゆく、そういう話である。

ウォルポールはある手紙の中で、このお話に言及しながら、自分は探しものを偶然みつける「セレンディピティ」とでもいうべき力がある、と友人に書いた。このことから、この言葉は「偶然、意図していないものを見つけ出すこと」というような意味で使われるようになったのである。この言葉はとりわけ、科学者が自分の行なった大きな発見や発明について語る際、しばしば引用されてきた。科学は推論や計算によって進歩してきたと思う人もいるかもしれないが、X線やペニシリンの発見をはじめとして、実は純粋な偶然による科学的発見・発明は、枚挙にいとまがない。そして優れた科学者というのはしばしばナイーブな人たちなので、自分が偉大なことを成し遂げたと人々から賞賛されたとき、それは自分の力ではなくて偶然の賜物なのです、と語ることに大きな喜びを見出してきたのだろう。

つまりここでは「セレンディピティ」とは、計画やプログラム通りに物事が運ばず、むしろそれらが失敗したり挫折したりすることを契機にして、探していたものよりもっと良いものが見つかる、ということの意味している。セレンディピティは、たしかに運の力について語っている。ただここで注意すべきなのはそれが、「運」が働いている現場においてではなくて、むしろそれによって何らかの成功をおさめた後で、そうした発見・発明のもつ、人知を越えた側面を強調するために使われている言葉だということである。つまり「セレンディピティ」とは、人間の意図的な工夫や能力を越えた、神の「恩寵」のごときものを無意識に言い表しているのである。

だが、ウォルポールが読んだ『セレンディップの三人の王子』とは、本当に「セレンディピティ」についての物語なのだろうか？ 先入観をもたずにこの話を実際に読んでみればわかるように、実はそうではないのである。ウォルポールが語り、多くの科学者たちが引用してきたような意味での「セレンディピティ」は、この物語の中には、はっきりとした形では見当たらない。そもそも、「偶然によって意図していた目的を越えた成功をおさめる」というテーマは、何もこの物語に限ったものではなく、古い説話の多くに共通する普遍的な主題だといえる。(日本の昔話の「わらしべ長者」などというのもそのひとつだ。)

だからといって、この物語が面白くないと言いたいのではない『セレンディップの三人の王子』の面白さは、むしろ別のところにある。主人公の王子たちの賢明さは実は「セレンディピティ」ではない。『セレンディップの三人の王子』の中には「セレンディピティ」は存在せず、むしろ「運」についてはるかに深い洞察を見出すことができるのである。具体的に説明してみよう。この物語の中でしばしば言及されてきたエピソードとして「迷子のラクダ」というのがある。これは、三人の王子がその旅のはじめの方で、あるキャラバンと出会い、その中の一人の男から、迷子になったラクダについて問われるという話である。王子のうちの誰も、ラクダそのものは見ていない。にもかかわらず、そのラクダが片目であり、歯が一本欠けており、一本の足を引きずっているという特徴を言い当てる。だがそれがもとでラクダ泥棒の嫌疑をかけられ、ペーラム皇帝(ササン朝ペルシアのパフラム五世のことだと言われている)の前に引き出されることになる。なぜ見てもいないラクダの特徴が分かったのか、という追及に対して王子たちは、道の片方の草だけが噛み取られていたこと、欠けた歯の隙間からこぼれた草が散らばっていたこと、そして足跡のうちのひとつが地面を引きずっていたことを述べ、それによってラクダの特徴を推測できたのだと釈明し、その「知性」によって人々を驚かせるのである。

たしかにこのエピソードは、たぐいまれな推理力の比喩として読むことができるかもしれない。だがそれは、「偶然がもたらす発見」というセレンディピティの現代的意味とは、あまり関係がない。ウォルポールの手紙を読むと、彼の考えていたセレンディピティとは偶然的な発見というよりも、むしろ直接知らないものを、かすかな手がかりによって正確に言い当てるような能力のことだったのではないかとも思われる。だとすれば、セレンディピティは「運の力」とはほとんど関係がない。だが『セレンディップの三人の王子』は、実はこれとはまったく異なった仕方で、「運の力」について語っているのである。

そのことを示している印象的なエピソードをひとつだけ紹介しよう。それは「恐怖の右手」と呼ばれる話である。王子たちはベラム皇帝のところに滞在している間、ある不思議な話を聞く。それは、海の彼方から空にうかぶ巨大な「右手」が現れ、五本の指を広げて人々をおびやかしているという国の話である。「右手」は気まぐれに降下しては、人間をつまみ上げて海に放り込んだりするので、その国の人々は恐怖におののいていた。人間の力によっては、とても太刀打ちできる相手ではない。この災いを解決すべく、彼らは海を渡ってその国の女王に謁見する。

さて、彼らはどのようにしてこの難問を解決したのだろうか？ 浜辺に出た三人の王子のうちの一人は、はたして海の上に現れた巨大な「右手」が、五本の指を広げて威嚇するのにもたじろがず、みずからの一方の手を差し上げ、二本の指を伸ばし、三本の指は曲げたまま、グッと突き出したのである！ ようするに「パー」に対して「チョキ」を出したのだ。それによって、今までその国を恐怖におとしめていた右手は、すずすずと海の中に沈んでゆき、二度と現れることはなかった。

これこそ「じゃんけん」の起源だ！と言いたいところだが、残念ながらそうではない。そこには、「運」というものに対処するある重要な知恵が働いていたのだ。それはどういうことだろうか。女王は当然のことながら驚き、なぜそのようなことができたのかと王子に問いかけた。王子の説明は次のようなものであ

る。「実はあの「右手」は、人々を無闇に苦しめるために現れていたのではなく、人々にあることを伝えたいがために現れていたのです。それは、ひとつの王国において五人の人間が力をあわせて心をひとつにすれば、その国を十分に治めることができる、そのことを示そうとしていたのだ。けれども、誰一人その意図を読み取らなかったの、苛立ちのあまり、右手は凶暴な振る舞いに及んでいた。そこで私は、二本の指を示し、五人ではなく二人だけでも、十分に国を治めることはできるということを示しました。すると「右手」は自分の意図が理解されたと知り、もはや現れなくなったのです。」

つまり「右手」とは意味のない暴力ではなく、ひとつのメッセージだったというのだ。そして、それが「脅威」として現れていたのは、まさに人々がそれをメッセージとして読み取れなかったからだというのである。王子のたぐいまれな頭のよさ、知恵はここにある。すなわち、それまで人々がたんなる無秩序な猛威としてしか見ることでできなかったものを、「ことば」として読み解いたという点である。だがラクダの話とは違い、ここでは王子がなぜ「右手」のメッセージを理解できたかということは書かれていない。何の手がかりもないのに、彼は「右手」のパーに対して「チョキ」を出してみせた。それによって驚くべきことに、「コミュニケーション」が成立してしまった、ということだ（まるで落語の「菟蓐問答」みたいだ）。これは「セレンディピティ」でもなければ、ふつうの意味での「能力」「知能」といったものでもない。それはいわば、窮地に立たされた人が心を空っぽにして行なったひとつの行為のようだ。そうした瞬間にこそ、「運の力」が現れているように思えるのである。

(岐阜おおがきビエンナーレ2006「じゃんけん——運の力」のために書いたテキストより)